

子どもの心的発達 (The development of a Child)

論文について

第一部は1919年に「誕生の状態におけるファミリーロマンス (Der Familienroman in statu nascendi)」としてハンガリー精神分析協会にて発表されたものであり、Kleinがその会員となる資格を得た論文である。第二部は1921年“Analysis of young children”あるいは“The Child’s Resistance to Enlightenment”としてベルリン精神分析協会にて発表されたものである。いずれも症例のFritzはクライン自身の3番目の子どもErich (1914年生)である。

の要約**導入**

精神分析によって得られた知見は、子どもがとても幼いころから「子どもの知識への欲望の成長が求めるに応じて、性的な知識を子どもに得させるべきである」ということ。そうすることで、子どもを強すぎる抑圧から守ることができれば、健康、精神的バランス、好ましい性格発達だけでなく、知的能力の発達にも良い影響が生じる。

症例Fritz (5歳)

精神発達は遅れていて、2歳で喋り始めたが、3歳半まで思ったことを続けて喋ることがなかった。4歳過ぎになってようやく色の区別を理解し、ほとんど4歳半になって昨日・今日・明日の概念を理解するようになった。常識的な理解ができない一方、記憶は飛びぬけていた。4歳半頃に急速な精神発達があり、同時に万能感が目立ってきて、話に出てきたこと(料理をするとかフランス語を自由に操るとか)はどんなことでも自分は完全にやってのけると確信していた。4歳9ヶ月頃に質問の数が著しく増え、出産に関する「人はどのようにして生まれるの？(How is a person made?)」というような質問が繰り返された。これらの質問には**いつも全く誠実に、また必要なときには子どもの理解力に合わせて科学的に、しかもできるだけ簡潔に答えられた**。Fritzは、言い伝えや様々なおとぎ話による超自然的な説明について、他の家族や保母や家庭教師や友達の家の人にも尋ねたりしながら、結局はそういったお話が本当でないことを確かめた。神の存在についても同様に、無神論者である母親(Klein自身)とその他の人との答えの違いを吟味していき、特に神の存在を許容する父親と否定する母親との違いに直面し、そのことが「**両親の過度の権威を引き下げ、万能感と全知の考えを弱める**」ことに繋がった。「この権威の弱まりは、**子どもに不安定な感じを起こさせたに違いなかった**」が、両親への信頼感が損なわれることはなかった。

第3期はFritzの質問は減り、「その知識をより確かなものにしよう」とする方向へ向かった。「How is a person made?」という質問の代わりに生活一般(existence in general)に関する質問が増えた。「こうしたあらゆる好奇心の中には、**興味を持ったものを根底まで検索し、その深さまでつき進んでゆきたいという欲求があるように**」みえ、それは、「**子どもの出産に際しての父親の役割についての無意識的な好奇心**」からきていたと思われた。この頃から性差についての質問が増え、性器や尿や大便に関する興味が高まった。Fritzの現実的な感覚は大きく改善され、全てのものを吟味しようという欲求が前面に出てきて、「長く馴染んでいたものや、長年知っていたもの、何度も観察したりやってみたことがある活動になどついて、その現実性と根拠を調べよう」とし続けた。「この方法で、**彼は自分の自主的な判断に達し、そこから再び自分自身の推理を引き出すことができるようになる**」。そして「現実の(real)」、「現実でない(not real)」という言葉の使い方が洗練され、「これらの‘現実の’物によって、**全ての目に見える実際のものと、願望と空想の中でのみ生じるもの**とを区別するための基本的な意味を理解し」、現実原則(reality-principle)が確立した。それはまず「**触れることができる物質的なもの(tangible physical things)**」から始まり、そこから「**見えるだけのものの実在性(actuality of what is only seen)**」、さらには「**考えられるものの実在性(actuality of what is thought)**」へと進んだ。また、Fritzは自分の権利と力の限界が明確に定義される必要性をとてはっきりと示し、**意志(will)・義務(must)・許可(may)・可能(can)**を使い分けた質問を繰り返した。

現実感の発達とともに万能感は衰退し始めていたが、「**発達しつつある現実感(developing reality sense)**」と「深

く根ざした万能感 (deep-rooted omnipotence feeling)」との間で葛藤しつつあり、後者は「教えてもらえばなんでもできるはず」という形で表現された。万能な父親に同一化したい気持ちと、自我を縛る力でもある両親の万能感を取り除きたいという気持ちとの間で、アンビバレントになっていた。この、現実感と万能感との間の葛藤に関して、「**現実原則がこの戦いにおいて上位に立ってその個人の万能感の持つ無限性に枠をはめる必要がある時には、それに平行した両親の万能感から咎められることによる苦痛な衝動の緩和を発見しようとする欲求が生じてくる。しかしながら、もし快楽原則が優位に立てば、両親の完全さの中にそれが防衛しようとしていることの支持を求めることになる。**」「現実原則に動かされて、彼が自分の無限の万能感をしづしづ放棄しようとする際、これに伴って、一般の子どもによく見られるように、自分自身と両親の限界を知ろうとする欲求が生じている」。権威の没落 (impairment) と万能感が弱まることには相互作用がある。Fritz は友達に邪険にされた時に、現実を否認する楽天性と、それを認めざるを得なくなった時の攻撃的傾向を揺れ動いた。攻撃的傾向は対象の死を連想させ、Fritz は死という現実に取り組み始めた。

教育学的かつ心理学的展望

子どもの全ての質問に誠実に答えることが生み出す自由さが、子どもの心的発達に大きく有益に影響する。思考は抑圧の傾向から保護される。すなわち、昇華を進める**本能的エネルギーをひっこめてしまうこと**から、また、抑圧されたコンプレックスにつながる観念構成的連想を抑圧してしまうことで**思考の筋道が破壊されること**から、思考を保護する。「この主要な害 (injury) (例えば知的な能力に対してであれば、**思考の自由な交流からくる連想を締め出すこと**) において、私が思うに、負わされた害 (injury) の種類 (kind) もまた、考慮に入れられるべきである。すなわち、どの軸の思考過程が影響を受けたのか、どのくらいのところまで思考の方向性、すなわち**幅広さ (breadth)** や**深さ (depth)** が、はっきりと影響を受けたのかということ」。この 2 つの次元は相互に独立して影響する。

深さの次元の害

未知のものへの自然な好奇心や質問衝動が阻害されると、子どものより深い質問も、より深く調べたいという衝動も抑制される。それによって、自分の疑問に深く入り込むことを回避するようになると、心的発達は妨げられ、現実感の発達も悪影響を受ける。その結果、日常生活の現実的な知識の表層や幅広さには馴染んでいるが、深みへと導く道は閉ざされてしまう。そうして、「科学的で豊富な考えを持っていながら、それを実行に移すという深い問題になるとだめになってしまうような才人」や、「表面的な現実性を正しく見ることができながら、深い結びつきにおいてのみ見出されるようなものへは盲目的、適応的で賢明な実用的な型の人」が生み出される。また、権威によって真実であると強いられたものが実は偽りであるということを認めなくてはならない恐怖、知らないことが実在することを認める恐怖が、同様の影響を及ぼすことで、「知的な事柄においては権威的なものから実際的な物を区別することができない人」が生み出される。

幅広さの次元の害

隠された認められないものへの嫌悪から、禁じられたものだけでなく何に対してでも尋ねるとい喜びが制限されるとすれば、抑圧は知識への衝動に影響を及ぼし、興味の欠落が生じることになる。その結果、「ある 1 つの問題に引きつけられて、その自分の適した限られた領域の外側のことにはどんな特別な関心も発展させずに、それに一生を捧げることのできる ‘研究者 (researcher)’ 型の人物」や、「深く入り込み、真の知識をもって新しく重要な事実を発見できるのだが、日常生活での大小にわたる現実的な事柄ではまったくだめな、つまりまったく非現実的な探求者 (investigator)」が生み出される。フロイトの失策行為の研究で示されるように、興味を示さないのではなく、興味を持たなくてはならないような状況でも、それに取り組むことができない。

知性や現実感覚を妨げる重要な要因である、性的で原始的なものへの拒否や否認は、解離 (dissociation) によって抑圧を機能させる。もう一つの妨げる要因は、**既成の考えを押し付けられる**という問題である。押し付けられれば反発を生むが、反発はまた依存していることに他ならない。知性や現実感覚は、ただそれに反対することで発達

するのではない。**現実的な知的独立性は、対立と服従の両極端の狭間から発達してくるものなのである。**

権威に由来する理性的なものに対する依存と独立の葛藤は、子どもと両親との関係に根ざしている。大人から権威的に倫理的・道徳的な観念が与えられることで、子どもの思考の自由は妨げられる。しかし、そのような観念は現実的根拠を感じさせないから、子どもはそれに疑問をぶつけるという形で攻撃し始める。それに対して、大人の側で「目に見えず万能的で全知の神の概念」が導入されると新しい危機が生まれる。そこには2つの要素が含まれる。1つは、幼い子どもは弱さ・孤独・寂しさを体験し、神様という大きく強い権威を求めるといふ、「生得的な権威への欲求」の存在である。もう1つは神の概念が自分自身の万能感と結びつくといふ、「生得的な万能感や‘思考の万能における信仰’」の要因である。

科学的思考としての現実原則の完全な発達は、**現実原則と快感原則との間で子どもが自分で行う調整 (settlement) と密接に関係している**。これが確立すれば、現実原則が思考と確立された事実の領域を支配するように、願望や空想が万能感に属するものとしてみなされるようになる。神の観念を教育に導入し、その取り扱いを個人の発達に任せることは、この点に関して、決して子どもに自由を与えるやり方ではない。

の要約

大人の神経症の要因は6歳以前の体験にさかのぼることができるという精神分析の知見から導かれるのは、子どもにとってひどく有害だ (injurious) と考えられている要因、特に強制的な道徳的要求を少なくするような工夫をし、子どもの「無邪気さに直接的に文化的風潮を対抗させることなく、いろいろな本能衝動やそれに伴った快感を意識することができるようにさせる」ことが大事だということ。「**私たちは、本能が部分的に意識化され、それに伴って昇華が可能となるための余地を残すような、ゆっくりとした心的発達 (development) を目標にするべき**」であり、目覚めつつある性的好奇心を表現するのを拒否することなく、段階を追ってそれを満たしてやることが求められる。

こうしたことがうまく行けば神経症や偏った性格の発達を完全に予防できるかという点、その効果は部分的なものに留まる。神経症の形成には素質 (predisposition) と環境因が影響する量的な要素を伴っているから。また、子どもの側にも知る事への抵抗が生じるものであり、**子どもが意識的に尋ねることができる質問の水準に合わせて、漸進的に性的な知識を伝えていくことが大事である**。

Fritz の場合も、探求衝動にもとづく質問は減り、質問は思弁的になっていったが、同時に紋切り型の質問もまた増えていった。物語を聞かされることも嫌がるようになった。子どもの探求への強い衝動は、同じように強い抑圧傾向と葛藤を生じるに至っていること、そして無意識に説明を拒む後者の抑圧力が支配的となっていることが、想定された。抑圧は知性に対して、幅広さ (breadth) と深さ (depth) の次元で悪い影響を生じる。性的好奇心の抑圧の結果として、子どもがいろいろ表層的に尋ね始める段階で固定化していたならば**深さの次元**で知性への害 (injury) が生じる。反対に、尋ねたり聞こうとしない段階で固定化するならば、**興味の表層と幅**が避けられ深さの方向だけへと導かれることになる。

Fritz は知る事への抵抗を示しつつも、夢のような空想の話に熱中することもあった。そこにはエディパルな空想が含まれ始めていて、父親への激しい攻撃性が表現されていた。Fritz は性器や尿や大便に関心を高め、(母親の) おなか (stomach) の中にも執着を示していた。子どもができるプロセスを説明されると、「彼の性理論はある程度解決したが、彼は初めて、たった今受け入れた説明の拒否された部分 (父親の役割) に興味を抱いた」。すなわち、「性理論の明確化により、現実の性的過程の知識を受け入れることの抵抗は克服され」と、今度は「エディプスコンプレックスが前景へ現れてきた」。Fritz はそれまでの遊びには関心を失い、クローゼットの中の出来事への空想を表現し続けた。その中での作業は生パンでいろいろなものを生み出すことであり、サディスティックな要素が含まれていた。

2ヶ月の分析の空白を経て、Fritz は入眠困難や夜驚を呈し、読んで一気に学ぼうという熱中をみせ、いたずらで機嫌はよいことは少なかった。Fritz は再び抵抗が強まっていて、その物語は恐怖症的なものだった。そこにはわず

かに同性愛的要因が現れていた。分析が再開され、物語が続き抵抗が減ってくると、Fritz は性的行為そのものについて質問し、その答えを得るとさらに抵抗は弱まった。そして Fritz は、愛する母親を失わないために母親の面影を分割し、空想には魔女が登場した。それは同性愛へと導く、ペニスを持った女性の象徴でもあった。そして、Fritz は父親の役割を取ることに失敗すると、父親に対する自分の攻撃性を父親に投影した。その後、再度数ヶ月間の分析の空白があったが、分析の影響は持続したように感じられた。

分析的な形での養育 (upbringing with analytic features) は、これまでの教育原理と対立するものではなく、むしろそれを補うものである。それも、より小さい子どもの方が抵抗が少なくてすむ。「あまりに深く及ぶ影響 (too far-reaching effect)」は怖れる必要がない。分析が目指すことは、子どもをひどいショックから保護し、制止を克服することであり、それは子どもがもっている良い性質に対して悪く働くことはなく、むしろ昇華の可能性を高めるものである。無意識であるよりは意識に上りつつあるものの方が、コントロールしやすいものである。

いくつかの問題が提起されうるが、まず、子どもの周囲の考え方が分析的なものとは全く異なる場合でも、子どもの方がそれが通じる相手を区別する。一日中分析的なやり取りを求めたり、何か別の目的で (例えば夜に起きていたために) 分析的なやり取りを求めたりしかねないという問題については、特定の時間を分析のためのものとして区別しておくことで操作可能である。また、「すべての子どもに分析的養育は必要なのか?」という疑問に対しては、後に性格の歪みをもたらすような、抑圧されたコンプレックスという形の種を持ち続けなくて済むので、ある程度の予防的役割を担っているといえる。病気は素因と経験の総和であり、誰でもがそこに至り得ると考えるならば、予防の効果もまた大事なものとなる。逆に子どもの性的好奇心を満たし、その表現を阻止することなく、子どもが本能衝動や Oedipus Complex を生き抜くことができるならば、分析的養育の必要性は低くなる。精神分析的原理にのっとった早期教育を実践するには、子どもに関わる大人たちが分析を受けることが求められるが、当面は分析家を中心とした幼稚園を作るという方法が実現可能かもしれない。

考えること (感想と疑問)

無意識的で本能的なものを抑圧することなく、子どもに本当に自由な思考を促す Klein の情熱は相当なものということが伝わってくる。そして、大人が安易に神様とか架空の存在を想定した説明をすることに対して、主に万能感という観点から厳しく追求していく Klein がいるように感じる。そもそも 19 世紀の凋落したオーストリア = ハンガリー帝国のユダヤ人社会で、父親と同様に無神論者であることはどんな意味を持つのだろうか。私自身も子育ての中で、言い伝えや神様の存在を恣意的に用いているように振り返るが、同時にそういう架空の存在を信じる気持ちはとても豊かなもののようにも感じている。Klein 自身もグリム童話を楽しめることが子どもの健康度の指標になるというようなことを書いているが、Klein にとってお話をお話として楽しむことと、そういうものとして主体的に考えることなく受け入れることの間には、大きな溝が想定されているということなのだろうか。それとも、無意識的空想に近いようなグリム童話のような内容と、子どもの自由な探究心と思考を抑圧するような「お話」とは明確に区別されているのだろうか。

この論文では子どもの知的側面の発達を中心に触れられているが、「現実的な知的独立性は、権威的な知識への対立と服従の両極端の狭間から発達してくる」というような弁証法的な考え方は、よい対象と悪い対象との対立が中心的な PS ポジションと、辛いことだがそれを同じ対象に含まれる部分としてみる D ポジションという考え方にも繋がっていくものであるように思う。また、知的好奇心に対する抑圧がどのように及ぶか、その深さと幅、あるいは深みと表面という次元を想定して考えを進めていくところは、立体的で力動的な Klein の考え方がよく現れているように感じる。

Klein による子どもの精神分析の出発点が、自分自身の子どもの分析的養育にあったということは、Klein の鋭い解釈の背景に、より日常的で密接な母子関係があるということを感じさせる。自分の子どもを分析することは、現在では肯定されるものではないが、治療者と子どもとその保護者との間に、鋭い解釈に対する強い反応や抵抗によって損なわれることがないような、強い関係が築かれていることはとても重要なことのように思

える。私自身の臨床感覚に照らしてみても、保護者の心理療法に対する相当な理解と支えが無ければ、週 1 回 50 分程度のプレイの中で、子どもに突っ込んだ解釈を伝えることはなかなか怖くてできそうもない。

Klein 自身が精神分析と出合って変化していったプロセスが、Erich の発達に促進的に影響している可能性もあるだろう。そういう意味では、子どもの問題を取り扱う時にその母親の分析がある程度有効であるということを示す論文とも言えるかもしれない。逆にたびたび訪れる精神分析的養育の空白についてはどうか？。Klein による養育は数ヶ月という単位でたびたび中断されている。この不在の影響は実際どのようなものだったのだろうか？。

内容に関しての一つの疑問 p.22 で Fritz が「もう L ちゃん(たち)は好きではないと繰り返しいった(declares repeatedly that he does not like the L. children any more)」のはどんな心の動きだろうか。

訳語の問題

なぜ development に「心的」という言葉をつけて訳したのだろうか。訳語のブレや分かりにくさ、あるいはちょっとした誤訳が散見するので、確認が必要。

：「教育」、「教化」あるいは「啓発」は enlightenment, p.11 の表題「实在」は existence で、文脈から「生活・暮らし」のとすべき、p.23 以降の「障害」という言葉はほとんど injury である。P.23 の「質」は kind, p.24 の「質」は「量 (quantity)」の誤訳、「発達障害」は mental development であり「精神発達」とすべき、p.25 の「質」も quantity, 「準備状態」は precondition で「前提条件」の方がいい、p.26 「デリケートな」は ticklish。

：enlightenment を「教育」と訳しているところもある、p.32 「性格の発達障害」は prejudicial development of character (偏った性格の発達), p.33 「素質」は(pre)disposition, p.36 「知的障害」は intellectual injury, p.37 の「表現」は interpretations, p.37 の脚注は誤訳、p.39 の「押し入れ」は closet, p.41 の「ヒモ」は cord で多分「へその緒」のこと、p.42 「モーターはガタガタいった」は they knocked them away でニュアンスが違う、p.43 の脚注の「お人形さん」は dollykins で「私の可愛いちっちゃな王様」は darling little kings であり発音が似ている、p.46 の「小部屋」は closet, p.50 の最初の「分割」は division, 次の「分割」は split off, p.51 の「将来」は「将校」の誤植。P.56 の「しかしながら」は 2 つとも、「どれほど～でも」の however, p.60 の「・・・障害へ逃避する子ども・・・」は「・・・障害を免れる子ども・・・」とすべき、そのほかにも日本語では意味が通じにくい部分がたくさんある。

- 文献 -

Melanie Klein (1921) " Love, Guilt and Reparation and other works in 1921-1945", VINTAGE

子どもの心的発達 (1921 - 1931) メラニークライン著作集 1 誠信書房 1983

オールアバウトメラニークライン 現代のエスプリ別冊 2004

Claudine and Pierre Geissmann (1998) "A History of Child Psychoanalysis", Routledge

Transration: the Melanie Klein Trust

Claudia Frank (2009) "Melanie Klein in Berlin, Her First Psychoanalyses of Children", Routledge

Transrated by Sophie Leighton and Sue Young